

雨乞いのご利益

瀬戸内海の沿岸地域は降雨が少なく、干ばつが続くと水不足が深刻になります。かつては神仏に降雨を祈願する雨乞いが各地で行われました。自然相手ですので効き目がある時もない時もありましたが、他に頼るすべがありませんでした。以下では、愛媛県西条市の鷺森神社と今治市の多伎神社の雨乞いの例をご紹介します。

■鷺森神社の雨乞い（愛媛県西条市）

天和3年（1683）、壬生川村（現西条市）辺りでは日照りが続き、川も池も干し上がり、池底には亀裂ができる状態でした。田植えはおろか苗代の養い水にも事欠き、村の鎮守の神様には雨乞いの人が絶えなかったといえます。記録によると、5月1日、代官は桑村郡内各村の代表者を鷺森（さぎのもり）神社に集め、神官に雨乞いの祈祷を行わせました。祈祷は3日3夜続けられましたが、満願の日も強い日照りで雲ひとつありませんでした。しかし、それから3日後の6日早朝寅の刻（午前4時）から翌7日寅の刻まで雨が降り、おかげで心配していた田植えも終わることができたため、鷺森神社はお礼参りの人たちで賑わったそうです。＜壬生川郷土史研究委員会編「壬生川郷土史」2009年＞



■多伎神社の雨乞い（愛媛県今治市）

朝倉村（現今治市）の多伎（たき）神社は今治藩の雨乞い祈願所として知られています。記録の残る江戸時代後期だけでも、文政6年（1823）6月、天保2年（1831）6月、嘉永5年（1852）6月、嘉永6年7月～8月に大雨乞いが行われています。嘉永5年（1852）の記録によると、5月12日より大干ばつとなり、御用所より多伎神社に雨乞い五穀成就の祈祷が仰せ付けられ祈祷を始めたところ、初日に俄に曇天となり瑞雨（穀物の生長を助ける雨）があり、また中日にも瑞雨があつて、その夜から翌朝まで大雨が降り続き、蒼社川にもたくさん水が出て朝より夕方まで渡しも止まるほどとなり、万人が悦んだと効験の様子が記されています。＜愛媛県土地改良事業団体連合会編「愛媛の土地改良史」1986年＞

